

---

# 東方銀聖夜

碧坂@五月葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方銀聖夜

### 【コード】

N02720

### 【作者名】

碧坂@五月葉

### 【あらすじ】

12月24日はいわずもがな。

約束のかけもちもちは厳禁ですよ。

## (前書き)

登場人物（話を読む前に関係を知っておくことを推奨）

霧雨きりさめ 魔理沙まじさ

三角帽子にエプロンがトレードマークのこの物語の主人公。魔法にできそうな薬草やら茸やらを爆発物にしてしまう危険人物であるが悪い人ではないので幻想郷住人からの評価は大きく割れる。箒で空を飛ぶ。

アリス・マーガトロイド

屋敷に一人暮らしの魔法使い。人形の扱いに長け、身の回りのことにも人形を用いる。見た感じ楽しそうだがすべての人形に気を配る必要があるため結構疲れるらしい。器用。

パチュリー・ノーレッジ

日々図書館で黙々と本を読んで過ごす日陰の知識人。基本運動しないので体が弱い。常に活発に飛び回っている魔理沙に憧れている。強力な呪文を行使出来るが喘息でスペルが唱えきれないことも。

・・・みんな知っているんだろうか。雪が降るのは偶然じゃない。かといって作威的なものでもない。雨も雪も雷も、存在に魅かれてくるだけだ。存在そのものが現象を呼ぶこともあれば感情や些細な行為が呼んでいたりもする。つまりは必然なのだーまあ、結局私が言いたいことはこの寒さにも何処かに犯人がいる、ということであつて・・・。

「寒いつ。」

・・・寒さで目が覚めたのは久しぶりだった。しばらく布団で粘つたがやつとの思いで脱出、まだ意識はもやもやしている。しっかしまあ、このぶんじゃ外も真つ白けだな。やれやれ・・・。

窓を一瞬全開にして即刻閉める。これだけで眠気なんて吹き飛ばつてもんだ。外は全身を貫くような寒気。悪くないな。これぞ冬つてかんじだ。

冬・・・といえば幻想郷じゃバカが活気づく季節だがそんなものにかまっているほど私だって暇じゃない。さつさと着替えて屋根の雪下ろしだなこりゃ。

雪。

去年は正直雪つてやつを侮っていた。見たかんじふわふわしていて手に乗せるとすぐに溶けるくせに、数さえ集まれば我が家の屋根を崩壊させるなんてことも容易に可能なのだ。なんて恐ろしい。あいつも凍らせようとなんてせずに相手を埋めてしまえば強いんじゅな

いだろうか。

過去の教訓を胸に上着を着込む。手袋にいつもの箒。よし・・・問題ないな。

落ち度がないことを確認して一息にドアを開ける。当然ながら外はまた一段と寒いというか痛いというか。奴らが無駄に張り切ってるせいだ。いつかとつちめに行つてやろうか。罨を張るのも良いかもしれないな。とはいえ奴らがいるからこそ暖炉の良さやありがたみが見えるもんだからあんまり無下にもできないのだ。一面倒だな。

そう、人は相反するものがなければ良さがわからない。暑いから冷たいものの良さがわかる。甘いからしょっぱいものの良さがわかる。つまりはそういうこと。

などと考えを巡らせつつも手を止めないのができるやつだ。愛用の箒が唸る。ほんと、何にでもつかえるやつだぜ。こいつの替わりになるもんはそうそうないだろう。掃除が出来て、空を飛んで、尚且つ誰かひっぱたいても大丈夫。うん。マルチだ。

しかし雪ってやつは本当に重い。しかも根元は凍りついて剥れない。躍起になってガリガリこするが一向に効果はみられない。あーいらつく。

ここで秘密兵器だ。「ミニ八卦炉」じゃじゃーん。これがあれば雪などおそるに足らずだ。残さず溶かしてやる・・・駄目だ。指がうまく動かない。悔しい。私はこの程度の寒さでは――

・・・と。何か頭をよぎったような気がする。頭をひねってもなかなかどうして頑固に思ひださせようとしない。まあ、本当に大事な

事ならいずれ思い出すんだろう。人間なんて大抵はみんなそんなもんだよな。

いつの間にか空模様は怪しく、追加で厄介物をよこしそうな気配だ。まったく、もう十二分に頂いたので結構。というかいらない。

そろそろ手先も限界だ。片付けて暖炉暖炉。ありがたさを享受しよう。

疑問は消えなかったが頭をかいても答えは出ない。とりあえず火をいれよう。外出る前にいれとけばよかった。こういうことは何故いつも終わってから気付いてしまうのか不思議で仕方がない。いつもいつも歯がゆい思いをする。暖炉はなかなか暖まってはくれず、灰の弾ける音だけが暖かい。これって詐欺だ。暖かいふり。表面的な暖かさ。何の役にもたたない。

.....。

気を紛らわせる意味も含めて愛用の八卦炉を磨きだす。こいつはなかなか気難しく、しっかり整備してやらないと実力の半分も出せない。しかし、火力と扱いやすさを両立させるならやっぱりこれだろう。

.....。

磨いているうちに暖かくなってきた。作業の疲れが押し寄せてくる。

抗う理由はない。大きな欠伸を一つして、そのまま・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「電話」が、鳴っている。

この「電話」とやらは、鈴之介から買ってきたものだ。なんでもこれで繋いである場所同士ならば言霊なしで遠距離通話が出来るらしい。それは良いんだが、生き物ですらない物に呼ばれるのはどこかシヤクだ。もつとも、呼んでくれないと困るのだが。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

やかましいそれを拾い上げる。はて、どうして使ったか。形状から推測するに、どちらかが声を聞く方でもう片方は声を伝えるのだろう。全くあいつ、詳しい説明も出来ないくせに売るもんじやないぜ。買う方も買う方とか言われると言い返せないが。

と。

「魔理紗？」

私の予想を裏切り、声は逆から聞こえてきた。

「聞こえてるぜ。」

ひっくり返して生返事を返すと向こうからは一呼吸おいて、

「今何処にいるのかしら？」

ときたもんだ。私は可笑しくなって、

「私は電話に出てるんだぜ？何処にいるかなんてしれたことじゃないか。」

「そうね。家にいるみたいね。」

「アリス？」

なんて冷たい声で話すんだ。まるで私に対して怒ってるみたいじゃないか。

「私はそれが問題だと言っているのだけれど。」

やっぱり怒ってるみたいだ。私は頭の中をひっくり返してーあるひとつの「約束」ーもっとも、一方的に決められてしまったのだがーに辿りついた。

「ああ、今日かー」

思い当たったときには「電話」からは耳障りな音しかしていなかった。

これは、まずい。なんとというか、まずい。緊急事態。至急対策案を



模索すべし。

そもそもは私の過失であった。クリスマスというものがいつ、どんなことをする日なのか、という知識を吹き込んでしまったのはまぎれもなく私である。大方飾り付けが好きなあいつは凝りに凝ったデコレーションで私を待ちかまえていたのだろう。しかし当の私は家で眠りこけていたのである。とんだ肩すかしをくったわけだ。怒るのも無理はないだろう。

「まずった……。」

私は帽子を深く被るとまるであのときのあいつのように走りだした。まだ鮮やかな落葉が舞っていた頃だ。

「もうすぐ銀杏も紅葉も打ち止めだぜ。」

「ほんと、寒くなってきたしそろそろ冬支度したほうがよさそうだわ。」

「冬支度ねえ。」

ふうー、とお互い白い息を吐く。

「冬……向こうじゃめでたい季節みただけだな。クリスマスとか、新年とか。」

「新年なら毎年祝うでしょう？そのくりすます、はわからないけど。」

「

確かに新年会は大賑わいである。神社に集まって飲めや歌えの大騒ぎ。なんだかいつもと変わらないような気もするが言つのは野暮っでもんだ。

「受け売りなんだが家をもみの木と灯で飾りつけて、御馳走を囲んでプレゼントを交換する、ってイベントみたいだな。」

言ったあとでもみの木がどんな木なのかわからないことに気付いてしまった。なんとなく尖ってた気がする。

「じゃあ、私たちもやりましょうか。」

奴は突然何でもないことのようにさらっと言った。

「はい？」

急になんだっていうんだ。いつも祝いごとに興味のないこいつがあれか、いつも厄介事に巻き込まれる礼をしようってか。

「・・・面倒だぜ。」

本心だ。警戒しているわけではない。

「飾り付けもお料理も私がやるわ。それで、くりすますはいつなのかしら。」

「二十四日・・・か？」

前言撤回、物凄く警戒している。

「わかったわ。三時に来てちょうだい。ばっちり準備しておくわ。」  
そのまま私の返事も聞かず、あいつはダッシュ一番で姿を消した。  
嫌な予感がしなかったと言えは嘘になる。

いわゆる「女の子らしくない」私からすれば家の飾り付けやら料理やらをしてゲストを迎えることの何が楽しいのやらさっぱりだが、おそらく、うん。やめだ。とにかく時間がないのだ。今は午後四時三十分。遅くてもあと大体一時間半の間にアリスの家に到着及び早急に機嫌を直す必要がある。やはりクリスマス、プレゼントを有効に活用するべきだろう。さて、どうしたもんか。

よく知り合いや友人にプレゼントを贈る時に相手の好きな物をそのまま渡す奴がいるがそれは危険だ。例えばアリスは腕の良い人形使いだがそんな奴に人形を贈ってもどうしても自分のものと比べると見劣りしてしまうように、それに詳しい人ならばそのプレゼントの欠点を容易に判断出来てしまうからだ。いわゆる自殺行為。相手がよく使う道具を贈るのもタブーだ。人間手になじんだものはそうそうとつかえが効くもんじゃない。

それらを考慮すると、いわゆる「自分らしさ」を前面に出していくべきだろう。言うのは簡単だが系列だな・・・と思ったらひらめき一発。冴えてる。

「よし、箒だ。」

そうと決まれば紅魔館。あいつなら箒の一本や二本常備だろう。偏見・・・じゃないよな。職業柄だし。

考えを巡らせつつ地面を蹴る。あまり高度を上げると凍りついてしまっ  
まいそうだ。ほどほどって大事だ。何にしても。

眼下には奇妙な光景が広がっていた。向こうの雑誌に載っていた「  
クリスマス」の光景とは似ても似つかない。

どうやら幻想郷では間違ったクリスマスの情報が横行しているみた  
いだ。

なんだかおどろおどろしい仮装行列だぜ。幽霊に吸血鬼。珍しくも  
ないな。

「どう思います？」

ペンを回す鴉天狗。今こいつに構ってる暇はない。

「今、忙しいぜ。」

スルーに努める。しかし大人しく通すわけもなかった。ぱたぱたと  
行く手を遮る。

「しつこい。」

「記者ですから。」

.....

無言の抵抗だ。今私はものすごく嫌そうな顔をしているに違いない。

「まあまあ、意見だけでも。」

人の良い笑顔でそう言う。しかしこれは表の顔、

「他所行きは飽きたぜ。」

と一言言っつてやるとさっきまでとは別人だ。

「なら素直に意見くださいよ。」

おお、カリカリしてる。しかしこっちも時間がないのだ。私は真っ直ぐに地上を指さした。

「はい？」

下を見る鴉天狗。当然私が狙ったのはそれだ。私は箒から跳び、そのまま大きく振りかぶる。

「悪いな。」

「ひっ!？」

―そして、そのままこいつの後頭部に振り下ろした。時間にして一秒あまり、幻想郷最速を誇る射命丸文も、私の奇襲には反応出来なかったらしい。次に会うのが恐いな。

私はせめて下を見ないように努めることにした―

やがて目的地に到着、門番はいつも通り舟を漕いでいる……。なんだこれ。

門番がクリスマス仕様になっている。飾りでぐるぐる巻き、バカ共の仕業か。

非常に面白いが時間がない。残念だ。気を取り直して館に向かう。

やはり暗い中ではなんと薄気味悪い建物だぜ。暗く、湿った感じの巨大な城。宝探しには良い雰囲気だ。

「邪魔するぜ。」

声が良く通る館内は静寂きわまりない。それでもあちこち歩き回るうち、廊下の掃除をする使用人を発見した。おお、赤服だ。

紅魔館はしつかりしてるな。……ってことはどこかに間違った知識を流す黒幕が……ってそんなことを考える暇はなかった。

手短かにことを話す。

「それで箒を譲って欲しい、と。」

「ああ。是非とも譲ってくれ。」

「貴女が正面から譲って欲しいなんて珍しいこともあったものね。」

「まあ今日は借りに来たんじゃないからな。」

「借りに。」

と言つか速いか奴の左の袖が光った。どことなく予想がついていたので跳ぶ。思った通り、ノーモーションで放たれた銀のナイフがわ

たしのすぐ横を飛んでいった。

「冗談じゃないわ・・・ちょっと借りる、という台詞一つで館から色々持っていかれてお嬢様やパチユリー様にお叱りを受けるのはいつも私・・・門番にまで気の毒そうな顔をされて・・・。」

「ちょ、落ち着けて!!！」

次々と繰り出される銀の刃。一筋縄ではいかないとは思っていたが元々まともに正面からぶつかって勝てる相手ではないので防戦一方もやむを得ない。あっちへこっちへ転がるしかなかった。

冷たい殺気がたちこめる廊下。どうしよう逃げたい。しかしここで逃げたら元も子もない。箒を手に入れなくては。こうなったらやることは一つだ。

私は伝下の宝刀人差し指を奴の奥に向け叫ぶ。

「あーっ！今にも倒れそうな食器の山が!!！」

「え!?!？」

振り向くメイド。職業病って恐ろしいな。残念だが私は訪れた機会を無駄にはしない。

すかさず八卦炉を奴に向け……。卑怯？知らない。

「マスタースパーク!!！」

「がはっ!?!？」

背中からスペルをブチ当てた。冗談では済まない吹っ飛び方で壁に大きな穴を空ける。死ぬなよ。

廊下がえらいことになってしまったが気にしない。この状況も後で咎められるのだろうか。気の毒に。ああ・・・私は今日一日で何人敵を作ったんだろう・・・。

・・・鬱だ。しかしまだ終わりじゃない。

・・・

すっかり暗くなった空を急ぐ。なんとか6時には間に合いそうだ。包み紙の上鴉でもすぐこれと解ってしまうのは少し味気無い気もするが、今の自分に出来るベストの選択をしたつもりだ。後悔はしていない。しかしなんだろう。何かがひっかかる。そう、何か重大な何かを忘れているような・・・。

残念なことに私にはこのとき、ゆっくり考える余裕はなかったのだ。

案の定、アリスの装飾は凝りに凝っていた。「クリスマス」とはこれだーってかんじ。

赤、青、緑。色とりどりの灯に囲まれたこの家を見て、綺麗だと言えない奴は歪んでいるといっても全く過言ではない。

しかしこのベルを鳴らすには勇気がある。約束ってやつは重い。簡単に結べるが、破棄したときの代償は相当なものだ。一体どれ程機嫌を損ねていることか。



鳴らすんだ。

鳴らせ、

鳴らすんだー

自分に言い聞かせながらベルを揺らした・・・。

「いらつしゃい。」満面の笑みだ。状況は芳しくない。

しかしそんな沈んだ気分はすぐに吹き飛んだ。

そう、玄関を抜けると・・・。

「凄いな。」

としか言い様がない。練りこまれた内装は綺麗で、派手で、好みだ。奥には天井すれすれのもみの木ーやっぱり尖っていたー周りを可愛らしい人形が手に手に灯や赤い靴下を持ち、頂点にはお決まりの星が据えられている。部屋中ふわふわしたもので飾り付けられ、隅の暖炉の煉瓦までが赤と緑で統一されていた。

「本を参考に見てみたの。」

「完璧だぜ。」

.....

感動の余韻に浸っていたところだが私には一番最初にしなければならぬことがあった。なんと言えば良いのかわからない。言葉を

飾るべきではない。一つだけ。

「あまりに見事な装飾は私の中の罪悪感をいつそう大きくしていた――」

「ごめんな。」

としか、言えなかった。それだけを言うのにどれだけ待たせただろう。

「……………」

「遅いつ。」

指を向け、拗ねた顔で言う。

「待たせたな。」

とだけ言って席についた。

「なんとかあったーか。」

初めて、部屋の暖かさに気づいた。

〔Sei n t G o n g 〕

私は一つ気になっていたのだった。

「アリス？」

「何？」

「あれなんだけどな。」

びしつともみの木をさして見せる。ぶら下がった靴下には私の持ってきた箒ー予想した通り、アリスは喜んでくれたーが刺さっている。

「なんだってプレゼントを靴下なんかに入れるんだ？」

「身近にあるものでプレゼントを見えなくするためじゃないかしら。」

「ふーん、でもそれだと長い物や大きな物は隠せないぜ？」

「そうね。。。。。」

アリスは立ち上がるとどこかへ行ってしまった。カップの中のココアの泡がくるくるとまわる。

少し経って戻ってきたあいつは本を持っていた。洒落た装飾の暑い本だ。

「どうやらサンタへの目印みたい。ちょっとケーキの様子を見てくるから。」

「ここに入れてくれーってか。よく応えるもんだなサンタって。」

少しサンタを尊敬する。

しかし私が気になっていたのはもっと別のことだ。つつかえがとれない。忘れている。何か大切な……

……

「電話」が鳴った。

今アリスはいない。私が受けた。

「はいはいどうも。」

鈴之助だ。珍しい。アリスに何の用だろう。

「私だぜ。」

「ん？ああ。魔理沙か。久し振りだね。」

いつも通りヘラヘラしている。

「なんか図書館の子にアリスの屋敷の場所を聞かれてね。なんでも魔理沙が来ないから探してるとか。まあそっちにいるなら問題無いな。」

「あれ？おーい、どうした？……」

嫌な汗が止まらない。これか。こういうことだったのか。

「ーそう、約束は一つではなかったのだ。ー」

思い至るのとはほぼ同時にベルが鳴った。アリスは上機嫌なまま、玄関へと歩いて行く。

止められるもんか。それは、自白に等しい。ただ、見送るだけ。

窓の外には何故かかぼちゃの着ぐるみを着たあいつと、事態が飲み込めず突っ立ったままのアリス。

聖夜を祝う鐘の音・・・

私にはそれが、これから起こるであろう惨劇のゴングにしか聞こえなかったのだ――

(完)

(後書き)

こんなのです。以上！感想、指摘等お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0272o/>

---

東方銀聖夜

2010年11月23日05時59分発行